

Q12 私の腎臓はいつ良くなるのでしょうか？

A12 以前、大学病院に勤務している時、市中の透析施設に派遣されたことがありました。そこで回診も半ばにさしかかったころ、ご高齢の女性患者さんから、「私は透析を2年もしていますが、腎臓は良くなりません。いつになったら、いつまで透析をしたら、私の腎臓は良くなるのでしょうか？」という質問を受けました。

この雑誌を読んでいる患者さんの多くは、ご自分がなぜ透析を受けているのか、すでにお分かりのことと思います。従って、この患者さんの質問を奇異に感じられるかも知れません。しかし、心配なのは、読者の皆さんの中にも、この患者さんと同じ気持ちで（腎臓病を治す目的で）透析を受けている方が、万が一にもおられはしないか、ということです。

回診で質問された患者さんにとって不幸だったことは、透析(療法)を選択するうえでインフォームド・コンセントが正しくなされなかったことではないのでしょうか。インフォームド・コンセントを「説明と同意」と訳したのも多くみられます。しかし、「十分に説明したうえで、同意を求める」のではなく、「十分な説明を理解することができたうえで、(患者さん自身が)自己決定する」のが本来のインフォームド・コンセントなのです。

つまり、「(医療関係者が)説得して、ある治療法の選択へ誘導する」ものではありません。

まず、もともとの腎臓病が進行性で、後戻りできない(回復しない)性質のものであることを理解するのが出発点です。では、最後にはどうなるのでしょうか？ 腎臓の機能がほとんどなくなってしまうと、尿として排泄されるべき老廃物が身体中にたまり、尿毒症という状態に陥ります。そのまま何もしなければ、ほどなく死に至る状態です。透析がない時代は、この時点が末期腎不全といわれる腎臓病の終末期であったわけです。

しかし、何としても生き延びたいという強い意志があれば、現代ではいくつかの選択肢があります。その一つが「透析」です。機能しなくなった腎臓の代わりに老廃物を捨て去り、体液の組成を整える、生命維持の方法です。従って、生きていくためにはずっと「透析」を続けなければならないのです。腎臓病を治すためではなく、生き続けるための方法なのです。この「透析」には、「血液透析」と「腹膜透析(CAPDを含む)」があります。それぞれ一長一短があり、また向き不向きもあります。

「透析」のほかにもう一つ方法があります。それは「腎臓移植」です。正常な腎臓の移植が成功すれば、透析をしなくても生きていくこ

とができます。「移植」には「献体腎(死体腎)移植」と「生体腎移植」があります。いずれも大切な点は、腎提供者(ドナー)自身の積極的な意思であり、周りの者や医療関係者が強制したり誘導したりするものではありません。

末期腎不全を生きていくには、現時点では「透析」か「移植」以外に選択の余地はありませんが、もう一つ、第3の選択肢として、末期腎不全をご自分の「寿命」と考えられた患者さんがおられたことも記しておかなければなり

ません。「透析」や「移植」による生命維持の可能性を理解したうえで、いずれの方法も選択せずに、従来の保存的治療のみで診てもらいたい、という信念を固持して逝かれました。

以上がご質問に対する答えです。答えを聞いた患者さんは絶句されましたが、しばらくしてその患者さんは「透析」で生きていくべく、積極的に「自己管理」に励むようになりました。

(島松和正／至誠会 島松内科医院・医師)

